眠らないホラアナを抱えたセイウチ

橋本　雄一

ヤマオカ先生。

そう口にするだけで、千葉大に来て八年になる僕は、八年分の自分にとっての知的愉悦の時間を思い出すことができる。母音が強い YAMAOKA という音も、真ん中のオで一休みすれば心地いい。そしてその音の連なりが僕の眼の前に形づくるのは、あのセイウチのような巨体の山岡捷利いがいにはない。

かてて加えて、カツトシって。まずその漢字のすさまじさ。だって「捷利」、戦争用語だぜ。お生まれの年代もあろうが、それにしても、同姓同名者というライヴァル（いたとして）にたいする防御率、たぶん限りなくゼロです。その読み方に長年同僚の他の先生も苦労されていた。だっていまや、古いお寺の片隅に見かける日露戦争の「戦捷碑」に使われる以外、見ることのできぬ文字だもの。しかも「首相の靖国神社参拝は憲法違反に決まってるじゃねえか」と切って捨てた戦後育ちの申し子が山岡捷利だった。これは名前と思想の生ける十字砲火である。

ヤマオカ先生は、知への渉猟範囲も、いつもワクワクするような話題の多極性も、その名前と同じく時間と空間を超越した人である。こちらが自分の専門領域のことも、古今東西問わず好きな映画と作家のこともひとたび吹っかければ、このセイウチの口からは出てくる出てくる。この八年間のことでもモリ・コイズミ・アベしなだれ三兄弟からカイチエミというアイドルの悲劇の最期まで、はたまた Deng Xiaoping のドラッグ性から「一瞬の夢」の Jia Zhangke 監督まで、エロティックな花、木槿から自宅で調理なさった各種焼き豚まで、先生のちょっとシャイだけど底なしのホラアナからは何でも出てきた。

そう、外国語センターからフタ波乱ほどあって今の言語教育センターになる八年間、あらゆるモノゴトを話し言葉で批評するときに使える液体を、ずいぶんご馳走になった（言語の意味と、それを発声するときの意欲とは、まったく別モノだということを僕は哀しいかなようやく知り始めている）。そんなとき僕がいつも感じたのは、日頃の会議で話しあう内容を、ヤマオカ先生ほどに解説できる人はいない、ということだった。実にトータルな先生の眼光だったのだ。不幸と思えたのは、先生のその眼光と声の意味が、周りにあまり知られる機会がなかったということだ。海を浜を自分の所有物として自分を何者にも恥じない、山であり岡でありそこに生きる人であるこの巨魁のセイウチはしかし、他人の話をいつも愛をもって聴いた。他人の話を愛をもって聴くというのは昨今、地球上では仙人にしかできない（当然だが仙人はなかなか俗世に姿を現さない。したがってヤマオカ先生もそうだった；笑）。言語教育センターの引っ越しが狭い期間にドタバタ進んでいた頃、僕は

自分の研究室で何への抗議か Modern Jazz Quartet の一番静かなレコードをかけてゆっくりしていた。そこへヤマオカ先生のっそり登場。「おいおい、こんなときに MJQ とはシュールじゃのう」とうれしそうに、広島弁つき。同郷の先生のこの一言で、ああ引っ越してもいいかな、と思えたのである。

自分のためにも他人のためにも眠らないこのセイウチは、これから通りすぎゆく東京のどんな夜景を眺めながら、レールの上を滑っていくのだろう。こう想像するのが僕の習慣だった。センター紀要を一緒に作り終えた日に、また A 号館時代にフランス語図書室で話に酔いしれた日に、総武線の電車のなかで先生と別れたあとである。この想像の楽しみは時に哀しみともなった。世の大学という場所が点取り合戦のようにアクセクし始めている昨今、ヤマオカ先生と過ごしたような学問の時間は今後どんどん少なくなっていくんじゃないかと。それでも僕はいつか先生がデスティニーを込めて言った、「何がどうなっても、ワシらはけっきょく書くことしかねえぞ」の言葉を、耳のなかに反芻する。しかしほとんど同じ瞬間、反省もする。自分は今、千葉でも北京でも国道に咲く夾竹桃でも映画館のスクリーンでもなんでもいい、「その場所」に千年宿るというゲニウス・ロキを、先生のようにいつも探しに行ってるだろうか、と。

そのことを真正面から叱咤してくれる先生は、もう千葉大にはいない。もちろん、眠らないセイウチ、山岡捷利先生はこれからも芸術のテクストに、街の無数のコーナーに、ゲニウス・ロキを求めて新しく闊歩されることだろう。だが僕はもういちどヤマオカ先生と一緒にあのフランス語図書室で、あのときの MJQ を聴きたいと思っている。